

高大接続改革と初年次教育について

義本博司

文部科学省大臣官房審議官

私たちは現在、高大接続改革についての有識者会議や中高教育審議会の大学教育の部会などで、「大学教育における三つのポリシーをどう位置づけていくか」といった内容をはじめとする、教育の質の転換に関する議論を進めています。その中でも、初年次教育は中心課題になっています。そこで本日は、高大接続改革と初年次教育をテーマに、現状の課題や今後のあり方についてお話しします。

各論に入る前に、本日の講演のポイントを整理しておきます。

第1のテーマは高大接続改革です。初等中等教育においては、教育の接続は比較的スムーズに行われています。しかし、高等教育においてはこれまで接続方法や教育のあり方に課題がありました。そこで今後は、高校教育、大学入学者選抜、大学教育を一貫した形で考えていくことが必要です。高大接続改革の軸になるのは「学力の3要素」です。学力の3要素とは、従来の認知的な知識・技術、知識・技術を活用した思考力・判断力・表現力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度のことです。特に今後の社会で求められる能力として、主体性や協働性が挙げられます。改革にあたって、この3要素をさまざまな形で取り入れることが必要だと考えています。

第2のテーマは、高校教育におけるPDCAサイクルの確立です。つまり、基礎学力テスト(仮称)の活用を1つの軸とし、PDCAサイクルによって教育を展開していくということです。義務教育においては、十数年前のいわゆる「PISAショック」以降、指導方法や教育のあり方が大きく見直され、学習改善が進んでいます。高校教育においても、基礎学力テスト(仮称)を基軸にPDCAサイクルを確立することが求められます。

第3のテーマは、大学入学者選抜です。大学入学者選抜のスタイルは多様化していますが、いずれの入試においても、各大学のアドミッションポリシーに基づいて学力の3要素を評価する方法の確立が大切です。大学や学部・学科について個々の考え方はあるにしても、大学入学者選抜やその評価方法に一定のフレームをつくりたいと考えています。

第4のテーマは、大学教育における三つのポリシーに関する内容です。ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーという三つのポリシーの位置づけを確立し、教学マネジメントによるPDCAサイクル構築をめざす動きについてご紹介します。

第5のテーマは、初年次教育です。初年次教育は、かつては単なる「基礎学力の補習」と位置づけられることもありました。しかし今後は、カリキュラムポリシーとアドミッションポリシーの結節点として重要性を増していくと思われます。そこで、高校教育改革をベースに、大学における本格的な学修をスムーズに開始するための施策や、アクティ

ブ・ラーニングといった能動的学修を実施していくことが求められます。各大学での取り組みにも期待が高まります。

第6のテーマつまり最終テーマとして扱うのは、教学マネジメントです。教学マネジメントといっても、さまざまな取り組みをただ行えばよいというわけではありません。エビデンスに基づいて施策の成果を正確に把握し、可視化できる形にまとめることも必要です。それぞれの学会などでも、学生の学修状況を検証していただくことが、今後の大学のあり方に大きな影響を与えるはずです。

私たちは現在、小・中学校と高校の学習指導要領の改訂について議論を進めており、この夏に論点を整理したところです。今回の改訂には、大きく分けて二つのポイントがあります。一つ目は教科の内容に関する改訂。もう一つは指導や評価の方法に関する改訂です。高校の例でご紹介しましょう。教科の内容については、例えば歴史については日本史と世界史を統合して近現代を中心に進める、あるいは情報教育の内容を問題解決に重点を置いたものにしていくというように、多様な案が挙がっています。内容に対応して、アクティブ・ラーニングのような生徒の主体性や対話を重視した指導を取り入れていくことも検討されています。この改訂によって高校での先生方の指導のあり方は大きく変わるため、現場においてはさまざまな議論が出ています。

大学教育については、ディプロマポリシーを起点に、卒業までにその水準に到達するためにどのようなカリキュラムを構成していくかを決め、それに合わせて入学者の大学教育への準備(レディネス)をみるためのアドミッションポリシーを考えていく流れが基本になります。

大学教育の入り口を担う初年次教育では、アクティブ・ラーニングなどの手法も用いながら、先ほどお話しした学力の3要素を伸ばすことも合わせて考えなければなりません。また大学入学者選抜については、生徒の能力を測るためのアドミッションポリシーを各大学が確立できるように、評価の枠組を構築する必要があります。センター試験に代わる新しいテストについても、知識・技能と合わせて思考力や判断力の要素を判断できるように、改革を行っていく予定です。実施上の課題を克服して、定着していくには時間はかかると思いますが、方向性はすでに明確になっています。

ここで、近年の高校生の状況について見ておきましょう。高校生の学力や学習意欲に関しては、大きな課題があります。その一つが、家庭での学習時間です。ボリュームゾーンである学力中間層の学習時間が1990年以降の約20年で激減しています。

ただ、学習時間の減少と比例して学力も下がっているわけではありません。2003年のPISAでは日本の高校生の学力低下が問題になりましたが、2012年の結果を見ると、OECD諸国中で学力はトップクラスに回復しています。高校1年を対象にした調査なので、むしろ義務教育の成果といえるかもしれませんが、いずれにしても、読解力と数学的リテラシーが1位、科学的リテラシーが2位となっていることは見逃せません。

一方で、高校生の自己肯定感や社会参画意識にも課題が見られます。アメリカ・中国・韓国・日本の高校生を対象とした意識調査では、米・中・韓の生徒に比べ、日本の生徒は「自分を価値ある人間だ」と自尊心をもっている割合が半分以下という結果が出ています。

また、「自らの参加により社会現象が変えられるかもしれない」と考える高校生の割合も、他の3か国に比べて低いのが目立ちました。自尊心や社会参画意識のある生徒を十分に育てられない高校教育のあり方に、問題があります。

また、高校生になると読書量が極端に減る生徒が目立ちます。2014年の調査では、1か月に1冊も本を読まない不読者の割合が48.7%となっています。この傾向は、学校教育や生活と深くかかわっているのではないのでしょうか。

高校教育は、学校での活動や、地域・社会における活動といった要素から成り立っています。高校教育の質を確保・向上させるには、教師の指導力向上や教育課程の見直しのほか、多面的な評価の推進も求められます。現状では評価を行うためのツールが十分でないため、高等学校基礎学力テストを一つの基軸にしようと議論を進めています。テストの内容は、高校の必修科目を中心に検討していく予定です。内容としては知識・技能の確認を中心には据えますが、小・中学校における学力調査のような知識活用型の問題も検討しています。

高等学校基礎学力テストを活用してPDCAサイクルを展開することによって、高校教育の現状における課題を解決しようと取り組んでいます。まずPlanとして学校ごとに教育課程の編成や見直しを行っていただき、Planを受けてDoとして具体的な指導に活かしていただきます。この際には、高校の先生方を対象にした研修などにも力を入れる必要があります。そしてCheckでは高等学校基礎学力テストで日々の学習成果をチェックし、Actionで生徒への指導改善や教材研究に反映していきます。さまざまな学習のあり方と学力との相関関係を検証し、教員研修の充実や教員加配といった体制づくりにつなげていくことが、テスト実施の狙いです。

高校教育の改革を受けて、大学入学者選抜についても改革を進めています。基本になるのは、「学力の3要素を評価する」という観点を各大学のアドミッションポリシーのベースに加えるという考え方です。3要素をどのように組み合わせて選抜を行うかは各大学の判断になりますが、フレームを作ることによって、高校生の具体的な進路選択や進学準備が変わると考えています。例えばこれまでの入試では、推薦・AO入試なら高校時代の学習・活動歴や面接、国公立大の一般入試なら記述問題によって評価が行われるのが一般的でした。しかし今後は、一定の枠組みがつくられることによって評価方法が相対化され、入学者のあり方も変わってくるのではないかと予想されます。

次に、ディプロマポリシー・カリキュラムポリシー・アドミッションポリシーという三つのポリシーに基づいた、大学教育の質的転換についてご説明します。私たちは、三つのポリシーに基づいて体系的にカリキュラムを編成し、指導方法の見直しや学修成果の把握や可視化、質的転換を支える体制づくりを検討しています。体制づくりに関しては、各大学におけるFDの充実や、教学マネジメントに係わる専門的な人材なども求められています。

大学教育の質的転換に向けて、今後はおそらく文部科学省でも、大学生の学修状況を定期的に把握するための取り組みを実施していくこととなります。この取り組みで見えてき

た課題を各大学にフィードバックし、各大学での教育内容や指導方法の改善に活用して頂きたいと考えています。そのうえで、三つのポリシーと連動した形での教学マネジメント構築を目指して、認証評価制度の改善も図っていきたいと考えています。

高大接続改革を目指して、私たちは接続システムの改革に関する議論を進めています。三つのポリシーの役割や、ポリシーに基づく教学マネジメントについて話し合いを行っています。

では、高大接続改革後にはどのような大学教育が行われるようになるのでしょうか。まずは大学教育の前段階として高校教育のデザインや考え方が変わり、初年次教育においても、単なる補習の役割を超えた内容の充実化が図られるはずで、学習指導要領改訂を平成28年度に予定しているため、教科書制作や体制構築を経て、平成34年度の高校1年生からは新学習指導要領での教育を受けることとなります。新課程生の入試は36年度となり、ここで一定の形が整います。そのため、私たちは37年度以降を目標に取り組みを完成させようと、準備を進めています。

本日の講演の結びとして、改革に携わる私の立場から初年次教育学会に期待したいことをお話しします。まずは、調査・研究です。それぞれの大学で初年次教育のさまざまな実践が行われ、事例が蓄積されていると思います。また、今後は高校改革による影響も予想されますから、初年次教育や高校改革を通じて学生がどう変わってきたのかについて、初年次教育学会で調査・研究を行い、現場での実践やデータの蓄積に活かしていただければと存じます。第2の期待として、IRの専門家育成のための大学で蓄積された効果的な取組や知見の提供が挙げられます。教学マネジメントの観点から考えると、改善をめざしてアセスメントを行うには、エビデンスとしてのデータが欠かせません。さらに、学修状況のデータ蓄積に向けて、今後は私たちも大学行政施策を行っていきますので、初年次教育学会との連携・協力並びにご支援をお願いしたいと考えています。

先ほど濱名先生が、義務教育の改革に関するお話の中で学力の3要素について触れ、「生きる力、知識・技術力、思考力・判断力」という表現をしていらっしゃいました。ただ、「生きる力」という表現は、厳密に言うと「主体性を持って、多様な人々と協働して学ぶ態度」です。学力の3要素は、学校教育法の中で教育の目的として規定されています。条文においては、特に主体性が強調されています。

では、主体性や協働性に関する内容がなぜ規定されているのでしょうか。一つには、社会が変容する中で、求められる能力が変わってくるのが予想されるからです。今後は知識量だけでなく、問題を発見・解決するためには、自分と違う価値観に向き合ったうえでどう考えるかが重要になってくると考えられます。グローバル化が進む中で、他者と協働して考えるプロセスを取り入れることが、必要になるわけですが、仕事の内容にしても、知識の蓄積や分析はコンピュータに任せられる面もありますが、人間の感性や他人とのコミュニケーションが重視される仕事が残っていくと考えられるため、生徒はこうした力を身につけていかなければなりません。職業によって濃淡はありますが、全ての人が考えるべき問題です。

学力の3要素をどのように評価するかは難しい問題ですが、基本的には3要素を軸にした改革を小学校から大学まで貫いていこうと考えています。

大学教育と高校教育の間には、いくつかの相違点があります。大きな違いは、高校には学習指導要領があり、教育の内容や方法に規則性があることです。また、高校の先生方は、個人レベルでは別として、研究のプロフェッショナルではないことも大きな特徴です。先生方の間で議論を呼んでいるアクティブ・ラーニングも、定着していけば高校教育の一大要素となっていくでしょう。

指導については、さまざまな面で転換が求められています。例えば、英語教育です。英語は「読む・聞く・書く・話す」という4技能の充実が学習指導要領改訂でも議論されており、近年では、TOEFL[®]などの外部試験を大学入学者選抜に導入する動きも見られます。この流れを受け、高校の先生方も、授業の中で自分で英語を使い、生徒に使わせるようになってきています。

他教科ではまだ知識注入型の授業が根強く、生徒は受身になりがちです。しかし今後は、総合的な学習の時間などを中心に、探求型の授業も取り入れていくことになります。具体的には、論文やプレゼンテーション、チーム学習、大学教授を訪ねて知識を得るなどの内容が考えられます。定着までには時間はかかると思いますが、大学入試改善と連動して高校現場での授業内容の改善が進むことに期待しています。

高校改革が進むにしたがって、生徒間・学校間の格差がさらに広がるのではないかと懸念する声も上がっています。確かに高校の現場では、中学3年生の98%が高校に進学する中、トップ校と下位校ではすでに大きな格差が生まれています。しかし、先ほどお話ししたPDCAサイクルの展開によって、学力の底上げや意欲・モチベーションの改善を図っていくことは可能だと思われまます。

大学入学者選抜においては、繰り返し述べますが、学力の3要素をいかに評価するかが課題です。各大学において評価の方法を組織的に検証し、改善を図っていくことが大事となります。

高大接続改革と初年次教育について

文部科学省大臣官房審議官
義本博司



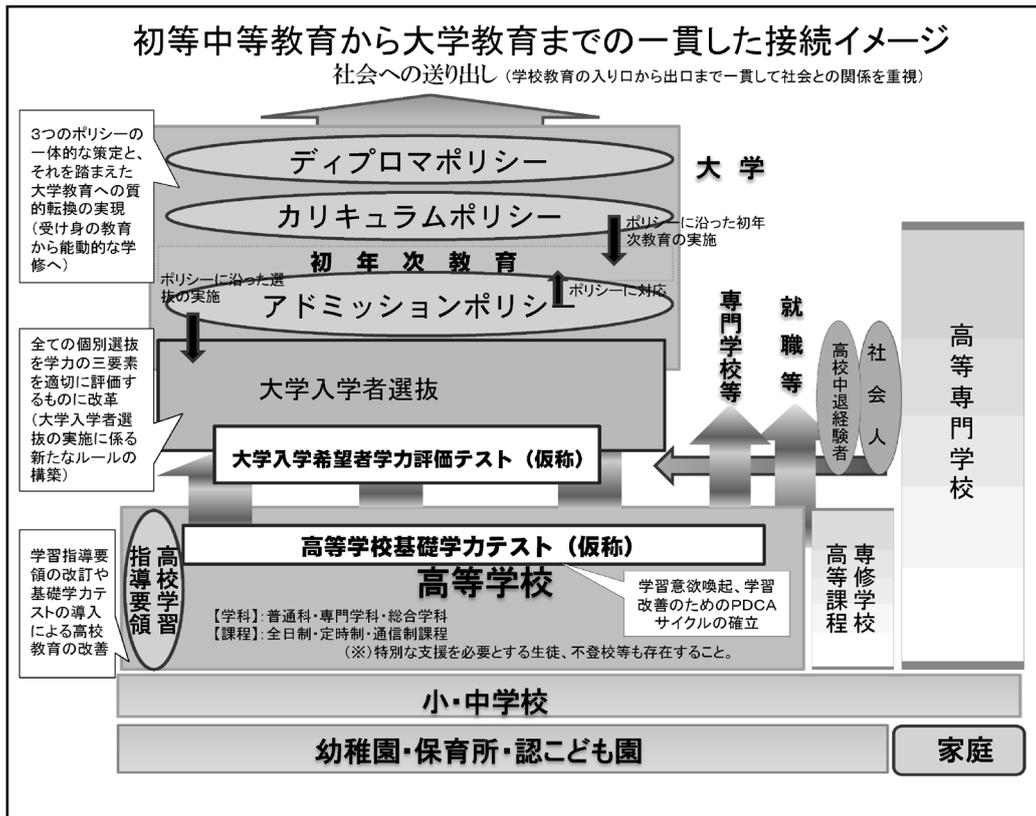
1

本日の講演のポイント

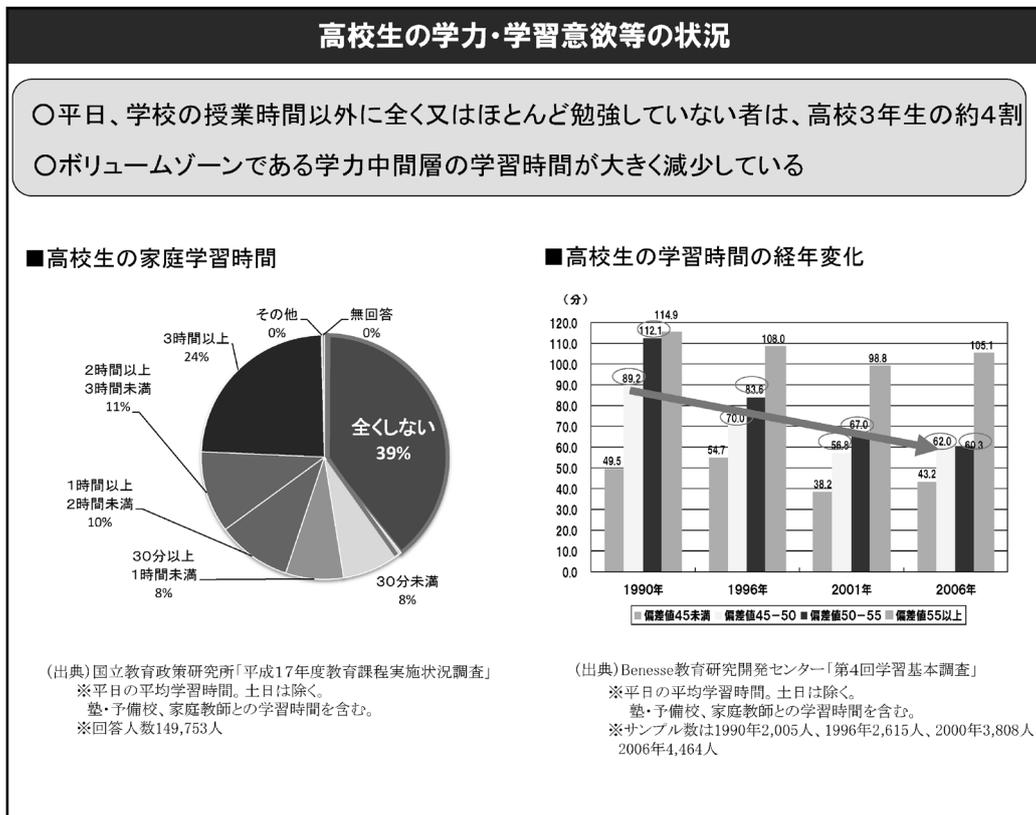
- 高大接続改革は、「学力の3要素」(*)を軸に義務教育、高校教育、入学者選抜、大学教育を一貫して接続するためのシステム改革
- 高校教育においては、基礎学力テスト(仮称)を活用し、学習意欲喚起、学習改善のためのPDCAサイクルの確立を目指した教育を展開(義務教育改革手法を高校教育でも展開)
- 大学入学者選抜においては、アドミッションポリシーによる学力の3要素に対応した評価方法や水準等の明確化を推進
- 大学教育においては、3つのポリシー(ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー)の位置づけとこれによる教学マネジメントの確立を推進(法令での位置づけ、ガイドラインの策定、情報公表、認証評価への反映等)
- 初年次教育は、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーの結節点として重要性を増す。高校教育改革を前提として、基礎学力の単なる補習を超えて、大学への学修の本格的な参入、能動的な学修の方法取得の本格的な実施へ。
- 教学マネジメントの確立を実効させるためには、IRなどエビデンスに基づく学生の学修状況・成果の把握と可視化が重要。

学力の3要素:①知識・技術、②思考力、判断力、表現力、③主体性を持って、多様な人々と協働して学ぶ態度

2



3

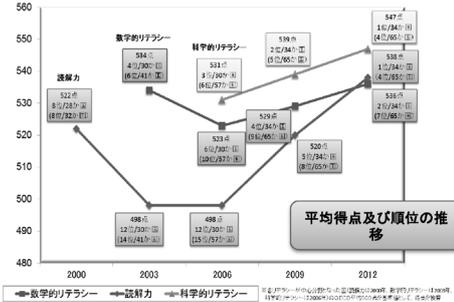


4

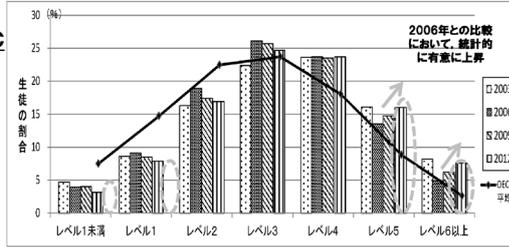
PISAから見た高校生の状況について

● 2012年調査は比較可能な調査回以降、最高の結果

- ・読解力、科学的リテラシーの2分野においてOECD諸國中トップ
- ・数学的リテラシーについて、OECD諸國中2位
- ・全分野において下位層の割合が減少し、上位層の割合が増加



我が国の習熟度レベル別割合 (PISA2012 数学的リテラシー)



【PISA生徒質問紙の結果】

「数学で学ぶ内容に興味がある」生徒の割合 (日本: 38%、OECD平均: 53%) 【PISA2012】
2003年に比べて5ポイント有意に上昇。

【2020年までに実現すべき成果目標】 ~ 新成長戦略(H22. 6. 18 閣議決定)

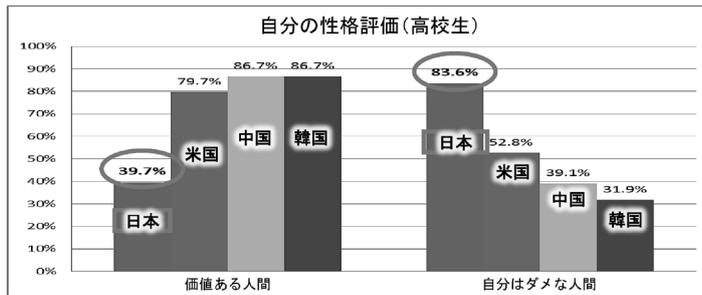
子どもの学力と挑戦力の向上: OECD生徒の学習到達度調査等で世界トップクラスの順位

- ① 最上位国の平均並みに低学力層の子どもの割合の減少と高学力層の子どもの割合の増加
- ② 「読解力」等の各分野毎の平均得点が、すべて現在の最上位国の平均に相当するレベルに到達
- ③ 各分野への興味関心について、各質問項目における肯定的な回答の割合が国際平均以上に上昇

5

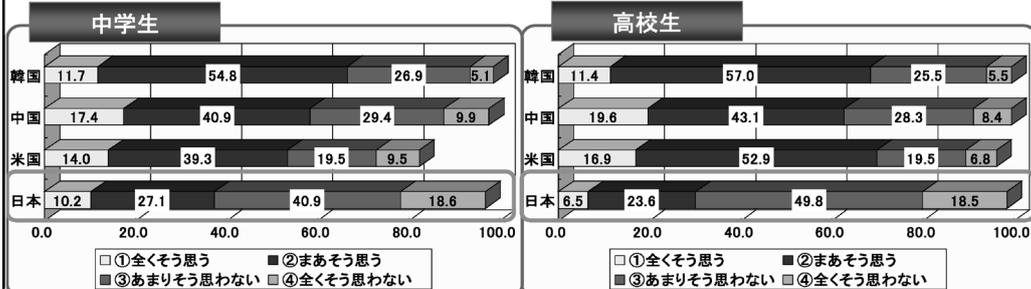
生徒の自己肯定感、社会参画に関する意識について

○米中韓の生徒に比べ、日本の生徒は、「自分を価値ある人間だ」という自尊心を持っている割合が半分以下、「自らの参加により社会現象が変えられるかもしれない」という意識も低い。



(出典)
(財)一ツ橋文芸教育振興会、
(財)日本青少年研究所
「高校生の生活意識と留学に関する調査報告書」(2012年4月)
より 文部科学省作成

【問33-2】私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない

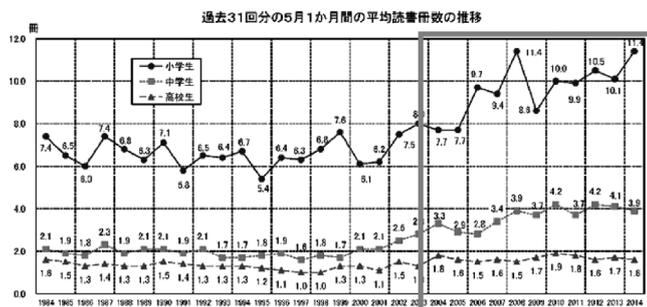


(出典) (財)一ツ橋文芸教育振興協会、(財)日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識 - 日本・アメリカ・中国・韓国の比較 - (2009年2月)」より文部科学省作成

6

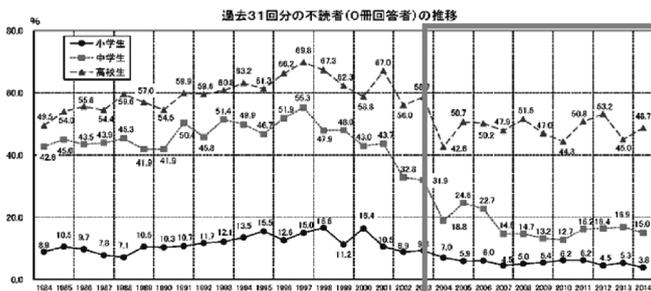
高校生の読書量について

- 本を読まない高校生が48.7%。
- 小・中学生に比べて、高校生の読書活動は、ここ10年ほど改善がみられない。



○2014年5月の1か月間の平均読書冊数は、小学生は11.4冊、中学生は3.9冊、高校生は1.6冊になっている。

○昨年度に比べ、小学生は大きく増加したが、中学生・高校生は減少している。



○この調査では、5月の1か月間に読んだ本が0冊の生徒を「不読者」と呼んでおり、今回の調査の結果では、

不読者の割合は、小学生は3.8%、中学生は15.0%、高校生は48.7%となっている。

○昨年度と比べ、小学生・中学生は減少したが、高校生は増加している。

(出典)第60回読書調査より(全国学校図書館協議会は毎日新聞社と共同で、全国の小・中・高等学校の児童生徒の読書状況について毎年調査を実施。)

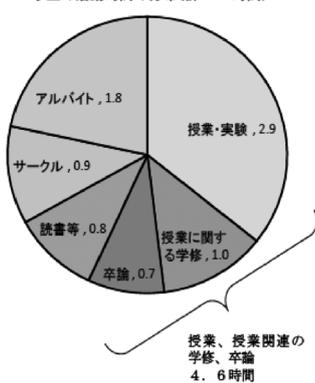
7

大学生の学修時間について

学生の学修時間の現状

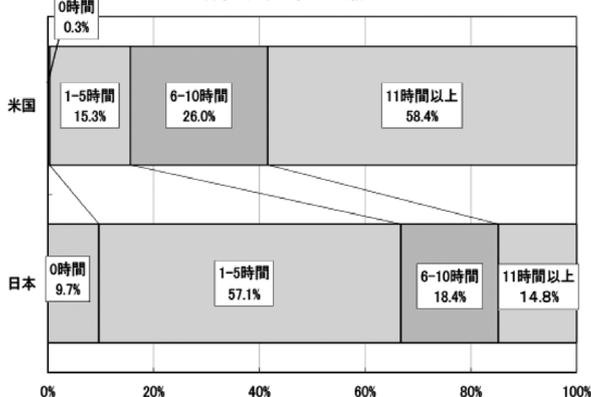
我が国の学生の学修時間(授業、授業関連の学修、卒論)はその約半日の一日4.6時間とのデータもある。これは例えばアメリカの大学生と比較しても少ない。

学生の活動時間の分布(計 8.2時間)



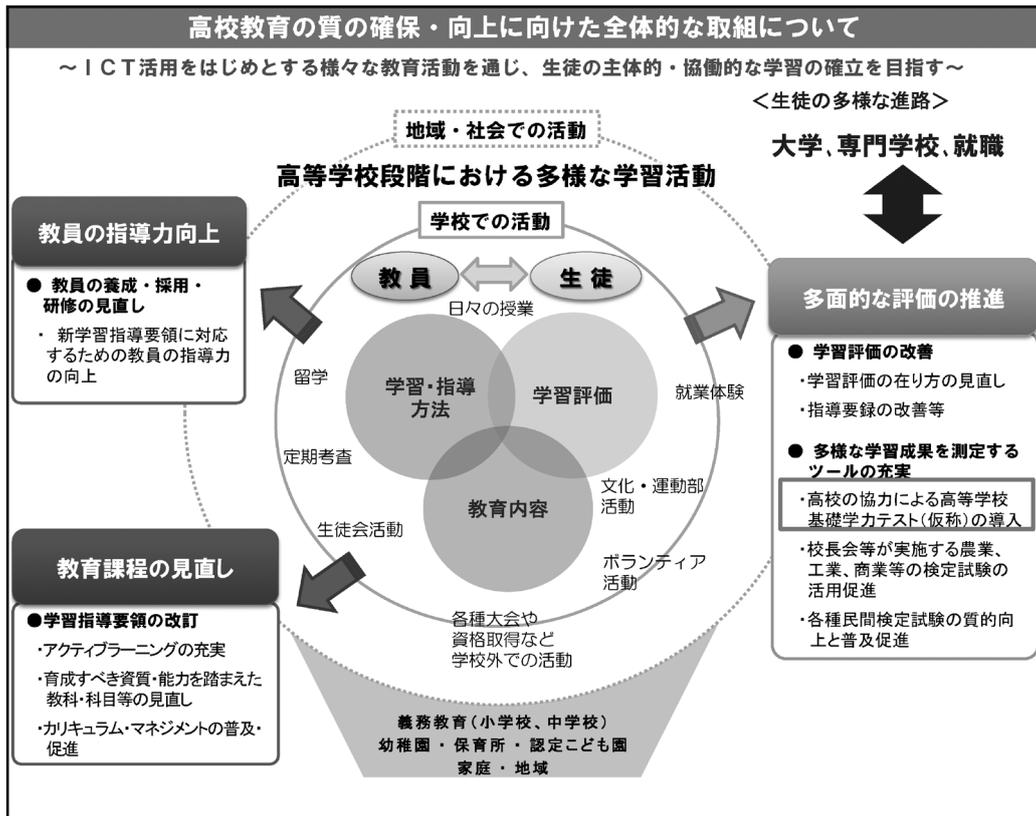
授業、授業関連の学修、卒論
4.6時間

授業に関する学修の時間(1週間あたり)
日米の大学一年生の比較

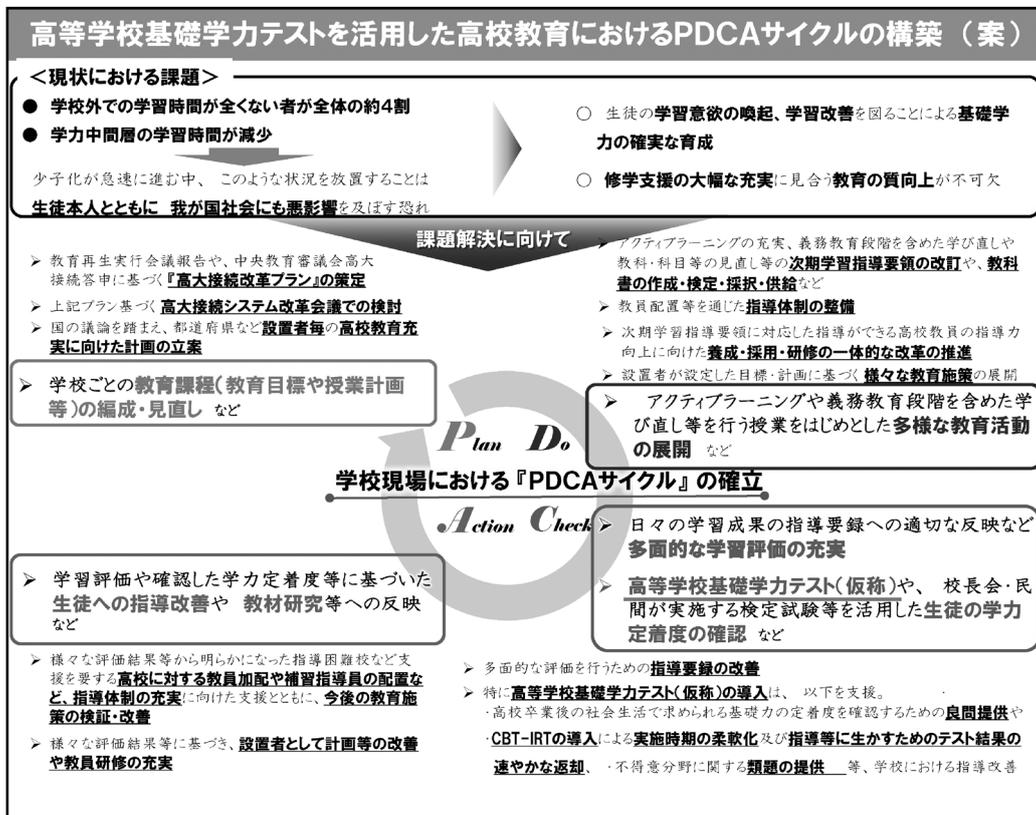


出典: 東京大学 大学経営政策研究センター(CRUMP)『全国大学生調査』2007年、サンプル数44,905人 <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>
NSSE(The National Survey of Student Engagement)

8



9

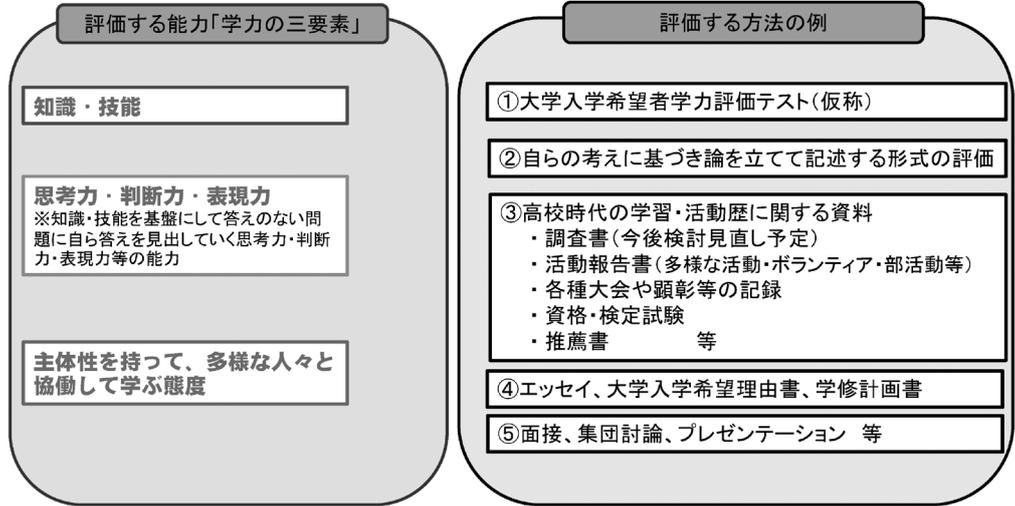


10

「学力の三要素」と入学者選抜における「評価方法」との関係のイメージ

アドミッション・ポリシーにおいて、以下を明示。 → これに基づき入学者選抜を実施。

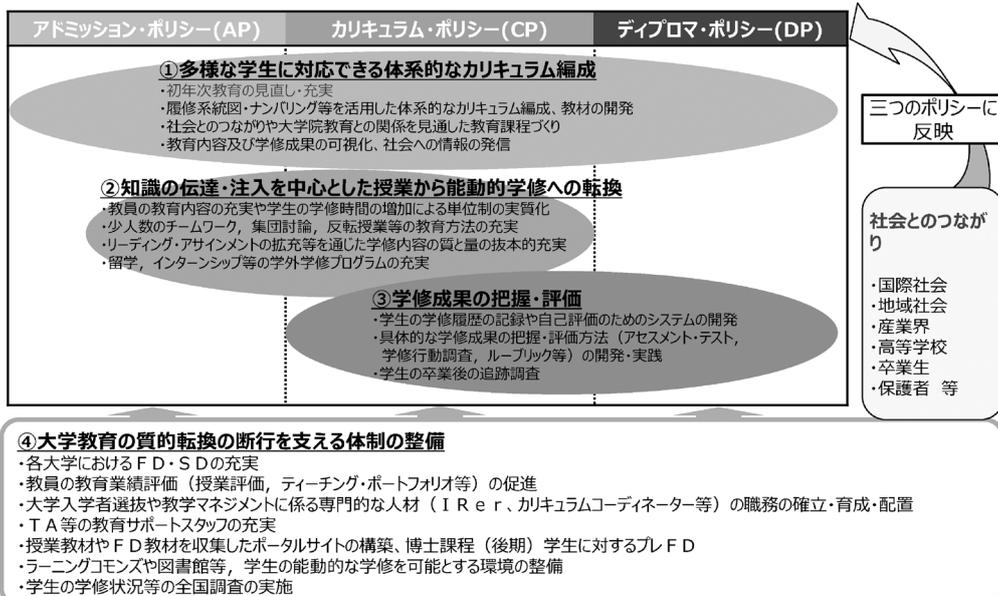
- ① 大学として、具体的にどのような力を持つ学生を受け入れたいのか。
- ② 学力の3要素について、具体的にどのような能力をどのレベルで求めるのか。
- ③ ②を適切に評価する観点から、様々な評価方法から何を選択し、どのレベルを要求し、どの比重で評価するか。



11

三つのポリシーに基づく大学教育への質的転換 (イメージ)

- ◆ 三つのポリシーの一体的な策定を法令上位置付け
- ◆ 三つのポリシーに関するガイドラインの策定
- ◆ 三つのポリシーに基づく教学マネジメントの確立



- ◆ 認証評価制度の改善(3つのポリシーによる教学マネジメント、内部質保証等)

12

高大接続システム改革会議「中間まとめ」(案)(初年次教育関係)

◆三つのポリシーに関するガイドライン

<総論>

- ・当該大学におけるディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの間の緊密な関係が外部者に理解できるように表現すること
- ・当該大学に関心を持つ人、入学希望者、社会人、外国人等、三つのポリシーを理解しようとする多様な人々が十分理解できるように内容と表現であること

<アドミッション・ポリシー>

- ・ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを踏まえるとともに、「学力の3要素」を念頭に置き、入学前にどのような多様な能力をどのようにして身に付けてきた学生を求めているか、入学後にどのような能力をどのようにして身に付けられる学生を求めているか等を、具体的に示すこと
- ・入学者選抜において、多様な入学希望者に対して上記の様々な能力や入学者に求めていること等の水準を判定するために、どのような評価方法を多角的に活用するのか、それぞれの評価方法をどの程度の比重で扱うのか等を具体的に示すこと

<カリキュラム・ポリシー>

- ・ディプロマ・ポリシー及びアドミッション・ポリシーを踏まえたカリキュラム編成、そのカリキュラムによる学生の学修方法・学修過程の在り方等を具体的に示すこと
- ・上記において特に、主体性を持つ多様な学生に対して、個々の学生が「自分がどうすれば何を身に付けられるのか」を理解することのできる、カリキュラム編成、学生の学修方法・学修過程の在り方等を具体的に示すこと
- ・主体性を持つ多様な学生の入学・在学を前提として、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーとも関係し合う初年次教育を、カリキュラム編成、学生の学修方法・学修過程の在り方等に具体的に位置付けること

<ディプロマ・ポリシー>

- ・卒業生を社会に送り出す上で、どのような能力を身に付ければ学位を授与するのかという方針を具体的に示すこと
- ・大学教育の質を担保し、授与される学位の信頼性を高めるため、学修成果の可視化を図るとともに、在学の水準に合わない学生の退学の基準等、具体的な基準を示し、それに基づく厳格な成績評価・卒業認定を行うこと
- ・カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーとの関係を具体的に示すこと

13

高大接続システム改革会議「中間まとめ」(案)(初年次教育関係)

◆三つのポリシーに基づく教学マネジメントの確立(重視すべき観点と大学に求められる取組)

<多様な学生に対応できる体系的なカリキュラム編成>

- ・学生の能動的な学修を促進するためのカリキュラム編成、特に学生の入学前の学習・活動経歴の多様性や選抜方法の違いを踏まえた初年次教育の見直し・充実(高等学校段階の単なる補習ではない大学における本格的な学修への導入、個々の学生による「学力の3要素」についての振り返りと大学における自分の学修過程のデザイン、能動的学修に重点を置いた初年次教育の充実等)
- ・学生の卒業後の人生の基盤として大学教育に求められる分野別の現代的なコア・カリキュラムの開発(高等学校教育との継ぎ目のない接続、先端的な学術研究を踏まえた学問の再体系化の成果、社会の変化の動向等の反映を重視)
- ・履修系統図、ナンバリング等を活用した、多様な学生が個々に入学から卒業までの学修過程を見通すことのできる、体系的なカリキュラム編成、教材の開発、学修支援システムの開発、学事暦の見直し
- ・地域社会、国際社会、産業界等の社会との関係、大学院教育との関係等を見通したカリキュラム編成、体系的・総合的なキャリア教育の実施
- ・教育内容及び学修成果の可視化、社会への情報発信

<知識の伝達・注入を中心とした授業から能動的学修への転換>

- ・履修科目の登録上限の設定など、教員の授業内容の充実や学生の学修時間の増加による単位制度の実質化のための取組の充実
- ・少人数のチームワーク、集団討論、反転授業等の教育方法の充実
- ・上記教育方法を身に付ける基盤となる情報の質の向上と量の拡大をはじめとする学修内容の質と量の抜本的充実、例えば、主体性を持って本質的な問題を発見し、答のない問題に対して粘り強く思考し、判断し、表現していく力を養うためラーニング・アサインメントの抜本的拡大
- ・高等学校教育が能動的学習に転換することを前提とした、主体性を持って多様な人々と協力して学び、働くことの基盤となる質の高い知識・技能の十分な獲得
- ・単に大学側がお膳立てしたお仕着せのプログラムでない、個々の学生が主体性を持って挑戦することのできる留学、インターンシップ、フィールドワーク等のプログラムの充実

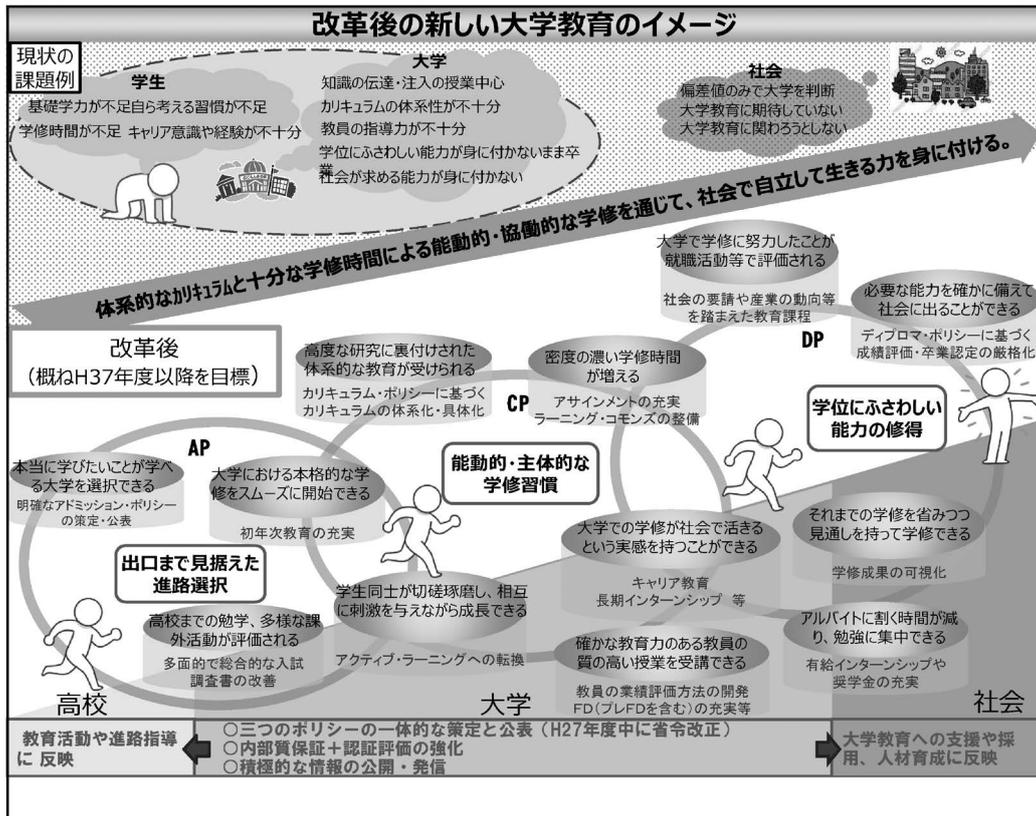
<学修成果の把握・評価>

- ・学修成果の具体的な把握・評価方法(アセスメント・テスト、学修行動調査、ルーブリック、学修ポートフォリオ等)の開発・実践
- ・個々の学生による学修履歴の記録、振り返り、学修デザインを支援するシステムの開発
- ・GPA制度の活用等による厳格な評価及び学修支援
- ・学生の卒業後の追跡調査と、三つのポリシーと調査結果との関係の分析、カリキュラム編成、入学選抜等への調査結果のフィードバック

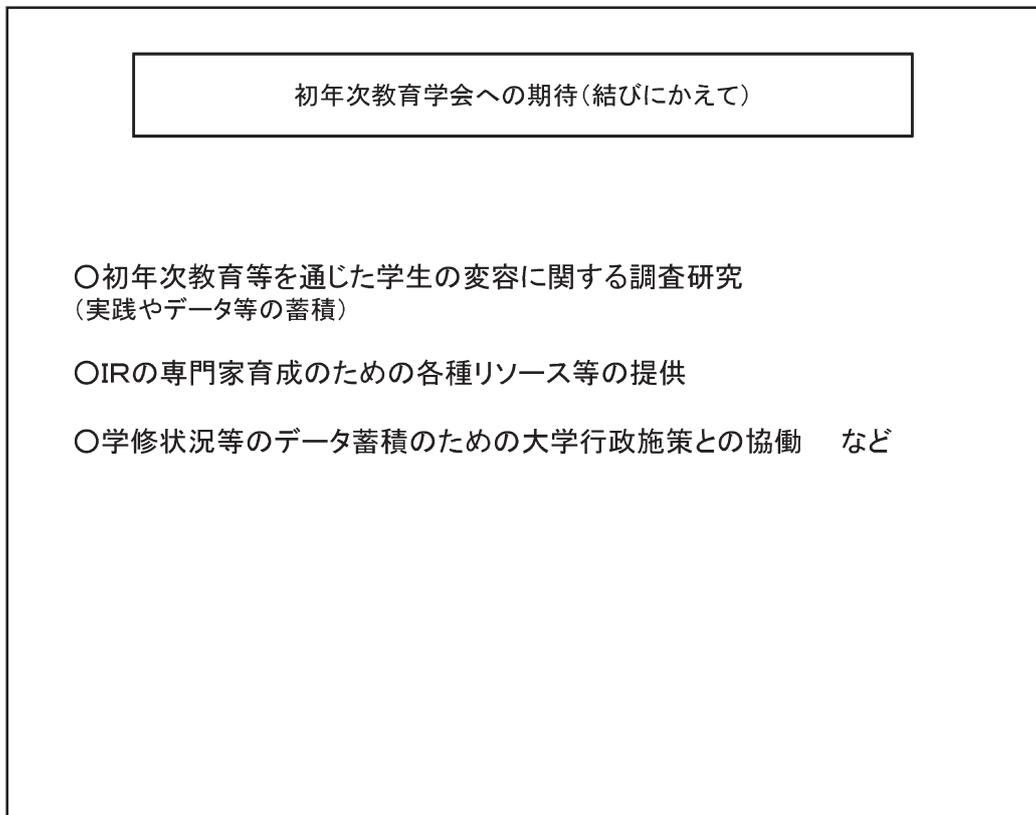
<充実した大学教育の実践を支える体制の整備>

- ・多様な学生の能動的学修の支援・推進や単位制度の実質化等に向けたファカルティ・ディベロップメント(FD)の実施と充実、大学間共同のFD拠点の整備、大学教員を目指す大学院生を対象としたプレFDの実施
- ・教学マネジメントの確立に資する、教職員に対するスタッフ・ディベロップメント(SD)の実施と充実
- ・教員の研究業績のみならず、教育業績の評価の重視(授業評価、ティーチング・ポートフォリオ等を含む)、評価結果の処遇や顕彰等への活用
- ・多様な入学希望者に対する入学選抜、多様な学生に対するカリキュラム編成と学修の支援、インストラクショナル・リサーチ(IR)等に係る専門人材(アドミッション・オフィサー、カリキュラム・コーディネーター、インストラクショナル・リサーチャー(IReR)等の職務の確立・育成・配置
- ・ティーチング・アシスタント(TA)等の教育支援スタッフの充実
- ・授業教材やFD教材の収集・蓄積・アクセス、カリキュラム情報へのアクセス、教職員・学生の学修支援等に資する統合的なポータルサイトの構築
- ・将来の優れた大学教員の育成に向けた、博士課程(後期)学生に対する大学教員としての意識の涵養やアクティブ・ラーニング等の指導法等を体系的に修得できる教育機会(プレFD等)の充実
- ・ラーニング・コミュニティや図書館等、学生の能動的学修を可能とする環境の整備

14



15



16